

宗乘研究に就て

中 島 觀 琇

四

(一)今此に宗乘といふのは、言ふまでもなく、吾淨土宗の宗乘にて、他の宗派の宗乘ではないのであらうと思ふ、そこで吾淨土宗の宗乘といへば、鎮西、西山等の區別もあらうが、今は但稱淨土宗、即ち鎮西流である、既に鎮西流であれば、末代念佛授手印抄で、淨土の宗義と淨土の修行とは、判然と定めが着いて、毛頭も間違へることの出来ないやうに成つて居る、その證據には、該授手印抄の冒頭に於て、淨土一宗の義を知り、淨土一宗の行を修する、始尾次第條々行の事と置いて、その順序を以て、六重、二十二件、明瞭に御示し下されてある、而してその淨土一宗の義とは、念佛の選擇法である、之を問師は、「三重の信」とも名けられてある、それは諸善萬行、みな回向すれば、往生の行と成るべきなれども、その中に於て、最も彌陀に親き行法を「五種正行」と名け、不回向の徳を具へたるものなれば、特に確實なる行と定められ、之を「正雜二行の分別」とも名けるのである、而してその五種正行の中に於て、第四の稱名正行は、阿彌陀如來本願の行なるが故に、之を「本願正定業」と名けて、最も確實にして、阿彌陀如來と最早約束濟の行なるが故に、正

中の正と、選り上げて、他の前三後一の四正行の如きは、本願正定業に對するときには、みな助業と爲すべきものである、此の場合を「助正二行の分行」と名けるのである、されば第一重の信の時は、正行雜行ともに、往生の行と信するが故である、第二の信の時には、正雜二行ともに、往生の行と成るべきなれども、五種正行は、特に阿彌陀如來に親く、讀誦の時も、淨土の三部經に限り、又禮拜の時も、彌陀一佛に限り、又觀察の時も、淨土の莊嚴、佛菩薩等に限り、又噴噴供養の時も、偏に淨土を噴噴し、彌陀を供養する等であるから、素より不回向の徳を具へて居つて、そのまゝ淨土へ眞向の行である故に、「別段に慥かである」と信するのである、而して第三信の時は、口稱一行の此の念佛こそは、同く正行とは言へながらも、特に阿彌陀如來の方より、御約束のある行なるが故に、最も「確實の上の確實である」と選り上げるときに、「三重の信心」とも名けるのである、是れ全く淨土一宗の義を知る所以である。

(二)次に「淨土一宗の行を修する」といふに就ては、三心、五念、四修、三種行儀、結歸一行三昧と明してある、是れは前に選り上げたる一行を、修するときの勤め方である、そこで「一宗の行を修する始尾次第條々行の事」ともいふてある、然るにその中の三心とは、行でない安心である、けれども安心の具はら無い行は、行に成ら無いので、「三心、五念」と「列ね

た次第である、三心は全く行では無いけれども、三心具足の念佛を以て、本願の行と定められたのであるから、先づ行を修するといふときには、第一に、三心具足が必要に成る、それが爲めに、先づ三心を明し、次が五念門である、五念門は全く起行である、その第一は、身業禮拜門、第二は口業嘖嘆門、この中に口稱の念佛が籠るのである、それから第三作願門、第四觀察門、第五回向門とは、みな意業である、此の意業と安心との關係が、動もすると混雜して、間違へられるので困ることがある、何故といふに、みな心の中のことである、併し目的と工夫では違ふ、その工夫の方を、意業と名け、目的の方を、安心と名けたのである、此の安心の中に「總安心、別安心」といふやうな區別も、立つのであるが、今は先づその様な事は、暫く措て、凡て目的に屬する部分が「安心」と名くべきもので在つて、又工夫に屬すべき部分の活用を「意業」と名けたのである、それ故に、五念門の中の作願門と、回向門とは、意業に屬するものであるから、起行である、之に反して三心の中の、回向發願心は、同じ様な名義で在つても、是は目的の方であるから、安心である、されば、五念門は、身口意の三業であるから、是れは起行である、所謂三心具足の起行なれば、確に往生の行と成る譯である。

(三) それから、四修、三種行儀と、あるが、是れは策勵法と形式である、その口稱の念佛を策

勵するに就ては、四修の法に過ぎたものはない、又その形式に於ては、三種行儀で盡してある、故に三種行儀と四修とは、離れて行ふ譯には行かない、それが爲に、尋常行儀の中にも、四修が無ければ、懈怠となる、別して別時行儀の時には、恭敬修を先と無し、又臨終行儀の時には、無餘修を先と爲して長時修に至らねば成らぬのである、それから彌彌終りに至つて、結歸一行三昧は、實に源空が目には、三心も、五念も、四修も、三種行儀も、みな南無阿彌陀佛と見るなりとは、全く淨土一宗の義を知りて、選び上げたる念佛の一行に結歸して、生涯の生活、喫茶、喫飯、衣服、飯食の、雜事に至るまで、念佛の助業となりて、口稱の一行に結歸するの實行法である、此の一行に依つて、安心立命するもの、先づ自己の罪惡を知り、自己の愚鈍を知り、智者の振舞をせずして、唯一向に念佛すべき身の上と成るに就ての研究が、全く淨土宗乘の第一義であらうと思ふ、若し此の外に奥ふかき事を存せば云々の御遺誠は、吾々が信する宗乘の奥義と思ふときに、正く宗祖の御心に入らんことを、御戀ひ申す上に於て、始て研究の必要も、あるやうに存せられて、益々稱名念佛と共に、辿りなきことである、されば吾淨土宗の研究としては、最早元祖大師に依つて、一宗の義は、明かに成つたのであるから、吾々末徒の分齊としては、先づ第二祖鎮西國師の御態度に習ふて、小心翼翼、如何にして宗祖の御心を得、如何にし

て宗祖の御行狀に習はんかといふことが吾々末徒が責任として勤むべき研究の第一義であらうと思ふ。

(四) 併しながら、今日の如く文明發達の結果として、思想問題の喧しき時に當つて、何の上にも種々なる異義を立て、古き物は、總て「陳腐」と唱へられ、改良にては生まゑるし、何事も改造で無ければ成らぬといふて、宗教も最早七百年前の宗教は、到底今日の人には、信せられざれば、宗教をも改造の必要ありとて、先年既に新佛教を唱へたる人士、既に少なからざるも、その言ふ所は、多くは破壊の方面のみ多くして、未だ「新教の完全」と認むるものなく、唯偏に破壊の方面を絶叫して止まざるの狀態は、恰も暗伯兒童の戲事の如く、未だ何等眞面目なる自行化他の實行あるもの、甚だ稀なるは、今日の時代の爲めに、遺憾とする所である、偶々眞摯なる人に依つて、新信仰を立つる人ありて、種々なる研究に依つて、鼓吹せらるゝ向あるも、畢竟は當世の人氣に、迎合せんとするものにて、その信仰の對象は、古來宗祖の信仰に背く所多くして、却て完全を發見したるものとも見られず、去りとて「間違ひ」といふにもあらざるべく、畢竟は、佛の三身を見る、見様の異説に過ぎぬ、或る一義の如きは、法身と應化身のみにして、報身佛を認めざる類あり、是れ今日學者と稱する人々の、見解に屬する所である、それから彌陀釋迦一體の

信仰、是れは「阿彌陀佛を本地法身として、釋迦牟尼佛と應化せられたるものと信する信仰である、故に「法華經壽量品に明す、久遠實成の釋迦佛は、即ち彌陀にして、自受用報身の覺體である、此の上より見るときは、無量壽經に説く所の十劫正覺の彌陀は、尙是れ垂迹にして、報身佛にあらずと」の意である、此に至つては、善導、元祖の、御信仰とは大に異つたものと成る、善導は既に淨土宗の信仰の對象は「酬因感化の報身佛なり」と「釋し、元祖も亦此の意を受けて「阿彌陀佛は、不取正覺の言を成就して、現に彼の國にましませば、命終の時には、必ず來迎し給はん」と仰せられてある、是れ正しく報土にまします報身佛を「信仰の對象」と「成されたるものである、されば善導、元祖の、御信仰の對象は、全く三身中の報身、具體的の他受用身の如來である。

(五) 然るに若し他受用報身を否定して、阿彌陀佛とは「法身佛又は諸佛共通の自受用身のみと見るが如きは、全くの異流にして、淨土教の改造である、それから又彌陀とは「本地法身にして、此の土に釋迦牟尼佛と顯れて、その光りを宣傳したるものである」といふ、是れ法華經と無量壽經との調和を試みたる信仰にして、是れ今日の人氣に適合する所以である、されど、善導、元祖の、信仰に對するときは、異流である、是れ等の異流と、從來の正流との關係を、明にして、その正流の特色と、異流の特色とを研究して、偏頗なく、

その優劣を定むるなどは、今日の宗乘研究として、最も價值あるものと思はれる所である。去りとて又此の方面にのみ没頭して、肝心の自己に求むる實行方面の研究を疎にしては、結局隣の寶を數ふるやうなものに成る、されば吾々淨土宗、正流の末徒たるものは、既定正流の信仰に依つて、その修行法は、四修、三種行儀等に於て、實地に研究したきことである、次には信仰の對象に關することも、亦實に正流異流の分るゝ所であるのだから、是れ亦混沌に附して成らぬ、最も研究を要することゝ思ふ。(定)

法照禪師の事蹟及教義並に

中唐代に於ける禪對念佛論

望 月 信 亨

一、法照禪師の事蹟

法照禪師の傳は宋高僧傳第二十一に出てゐるけれども、その中には重もに五台山に入られた時の靈異を記するのみで、其の郷貫出處を始め、從學の師、乃至遷化の年月等に關して何等の記載もない。それゆへ今少し他の材料からそれらの事を調べて見やうと思ふのである。